

## オトギバナシ「仙人」素材例

堀 部 功 夫

一

大正十一年発表された、芥川龍之介「仙人」は、皆さん。「改行」私は大阪<sup>①</sup>にゐます。ですから大阪の話をしませう。

で始まる。四月二日・大阪毎日新聞社刊『サンデー毎日』第一年第一号子供欄の第七ページ（第八ページに続く）に、「オトギバナシ」と副題し、総ルビ「漢数字は除く」・挿絵入りで載った。

「仙人」梗概を四段に分けて書くと、

(Ⅰ) 仙人志願者の権助を、狡猾な医者の女房が騙して雇う。

(Ⅱ) 権助は、医者の女房に言われたとおり、二十年間無報酬で働く。

(Ⅲ) 二十年目、医者の女房が権助を松の木へ登らせ、体を木から

離すよう命じる。

(Ⅳ) 権助の体は墜落せず、天に上っていく。

となる。(仙人の松に上り登天の話)（「手帳6」）であった。

その後の「仙人」本文を概観しよう。『三つの宝』には、収録されない。岩波書店版全集は五回出ているので、第何次と仮称する。

先行研究<sup>②</sup>で未言及の、流布本を中心に、羅列する。

A I（第一次）『芥川龍之介全集第三卷』（岩波書店、昭和三年六月二十日） \* 初出本文の文字・記号を小改訂する。本文の書き換えは、(へ、暫く) ↓ (少時)、(辭儀) ↓ (時宜)。仮名遣い訂正。くりかえし記号廃止。句読点の異同。漢数字にルビ付加。ルビの書き換えは、(へ、めうにち) ↓ (あした)、(へ、こんにち) ↓ (けふ)、(へ、ぢう) ↓ (うち)。正誤<sup>③</sup>以外の、書き換え根拠が分らない。末尾に(へ、大正十一年四月) ↓ と記す。

- A II 〔第二次〕『芥川龍之介全集第四卷』（岩波書店、昭和十年六月五日） \* 底本は、第一次。〈事が〉↓〈事は〉（109頁2行）、〈ありは〉↓〈ありや〉（114頁13行）、〈手も〉↓〈手を〉（115頁2行）と改変。書き換え根拠が不明である。末尾に〈（大正十一年三月）〉と記す。
- B 『蜘蛛の糸』（羽生書房、昭和二十四年七月五日） \* 底本は第二次。現代仮名遣い〔ただし、促音・拗音を小さく表記することはない〕。誤植は、〈出ました〉↓〈来ました〉（132頁8行）、〈両手とも〉↓〈両手も〉（134頁11行）など。
- C 『日本児童文学全集三 芥川龍之介集』（河出書房、昭和二十八年九月二十日） \* 底本は第二次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換え多し。誤植は、〈大阪の御城〉↓〈城〉（151頁10行）、〈仙人になる術〉↓〈仙人の術〉（153頁11行）など。昭和二十九年三月十五日再版。
- D 『小学生全集44 くもの糸』（筑摩書房、昭和二十九年一月十五日） \* 底本は第二次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換え多し。助詞の書き換えも多い。誤植は、〈煙草〉↓〈きせる〉（51頁5行）、〈お前さん〉↓〈お前〉（52頁2行）、〈大阪の御城〉↓〈お城〉（54頁5行）、〈仙人になる術〉↓〈仙人の術〉（56頁8行）、〈権助の体は、権助の着ていた〉↓〈権助の着ていた〉（57頁13行）など。
- 昭和三十一年十月十日再版。昭和三十七年九月十五日『新版小学生全集三十二』。
- A III 〔第三次〕『芥川龍之介全集第五卷』（岩波書店、昭和三十年一月六日） \* 第二次に同じ。
- E 『少年少女日本文学選集③ 芥川龍之介名作集』（あかね書房、一九五六年十月一日） \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。誤植は、〈口も〉↓〈口を〉（125頁上本文11行）など。昭和三十三年九月十日再版。
- FI 〔旧版〕『角川文庫 杜子春・蜘蛛の糸』（角川書店、昭和三十三年一月三十日、管見本は昭和三十八年十月三十日十四版） \* 底本は第二・第三次。ルビ減。〈忌忌し〉↓〈忌々し〉と反復記号使用のほか、異同に気がつかない。
- GI 『芥川龍之介全集第三卷』（筑摩書房、昭和三十三年四月二十五日） \* 底本は岩波第三次。漢字新字体。ルビ減にするほか、異同に気がつかない。筑摩全集にも後刷・後版があるけれども、同紙型と見える。
- II 『新日本少年少女日本文学全集39 続芥川龍之介集』（ポプラ社、昭和三十五年十二月十日） \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。改行・句読点の異同がある。
- III 『少年現代日本文学全集28 続芥川龍之介名作集』（偕成社、

昭和三十一年十月十日再版。昭和三十七年九月十五日『新版小学生

昭和三十九年八月五日) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、

漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。改行・句読点の異同がある。誤植は、へおれの女房の方) ↓女房のほう(11頁上14行)。

I II 『新・日本児童文学選7 杜子春・くもの糸』(偕成社、昭和四十年九月二十五日) \* 底本は『少年現代日本文学全集28 続芥川龍之介名作集』。同じ誤植が残る。

J 『ジュニア版日本文学名作選6 羅生門・トロッコ』(偕成社、昭和四十年十二月二十日) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。改行・句読点の異同がある。

K 『芥川龍之介全集第一巻』(春陽堂書店、一九六六年九月三十日) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。句読点の異同多し。漢字↓かな、かな↓カナ、漢字同士の書き換えがある。

L 『芥川龍之介全集第六巻』(角川書店、昭和四十三年五月二十日) \* 底本は第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かな、漢字同士の書き換えがある。誤植は、へ少時は) ↓少時(122頁下13行)。

M I (旧版) 『新潮文庫 蜘蛛の糸・杜子春』(新潮社、昭和四十三年十一月十五月初版未見、管見本昭和四十九年九月十五日十二刷) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓

かなの書き換えがある。

N 『カラー版日本の文学8』(集英社、昭和四十三年十二月二十八日) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。改行・句読点の異同がある。昭和四十七年一月十五日刊『ジュニア版・日本の文学8 蜘蛛の糸』は同紙型を使用する。

F II (新版) 『角川文庫 トロッコ・一塊の土』(昭和四十四年七月三十日改版、未見。管見本昭和六十一年七月三十日改版二十七刷) \* 底本は角川書店版『芥川龍之介全集第六巻』。漢字↓かな、句読点の異同の書き換えがある。

O I 『旺文社ジュニア図書館 くもの糸・トロッコ』(旺文社、昭和五十年十一月十日) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。改行の異同がある。誤植は、へ?) 記号落ち(145頁1行)、へ少時は) ↓しばらく(145頁11行)、へ好い。) ↓いい(148頁2行)。文庫本(一九八九年?)、旺文社必読名作シリーズ) がありそうだが、未見。

P 『春陽堂少年少女文庫 世界の名作・日本の名作8 蜘蛛の糸・杜子春』(春陽堂書店、昭和五十一年十月八日) \* 底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かな、漢字同士の書き換えがある。改行・読点の異同がある。刊年月日不記の『富士ライブ

ラリー〈少年少女世界名作全集〉3 蜘蛛の糸・杜子春』（富士メル）は同紙型を使用する。

Q 『日本児童文学大系十二』（ほるぶ出版、一九七七年十一月二十日）\*底本は第三次。漢字新字体。ルビ減。誤植は、へ出来はしません）↓出来ません（218頁上1行）。

A IV 〈第四次〉『芥川龍之介全集第五卷』（岩波書店、一九七七年二月三日）\*底本は初出。ただし、へ江）をへえ）と改め、初出本文にあった問題点を正す。すなわち、へ有難う）へ難有う）、へ向ふ）へ向う）の不統一を無くし、誤入のへ）を取る。誤植は、へ手も）へ手を（382頁10行）。

I III 『偕成社文庫 杜子春・くもの糸』（一九七八年四月初版未見、管見本は一九八四年六月十三刷）\*底本は『少年現代日本文学全集 28 続芥川龍之介名作集』。同誤植が残る。

R 『大活字シリーズ 蜘蛛の糸・杜子春』（埼玉福祉会、昭和五十九年四月十日）\*底本は旧版『新潮文庫 蜘蛛の糸・杜子春』。誤植は、へ云うからは）へ云うからには）（92頁下13行）。

M II 〈新版〉『新潮文庫 蜘蛛の糸・杜子春』（新潮社、昭和五十九年十二月二十五日三十八刷、未見。管見本昭和六十年四月二十五日三十九刷）。\*底本は第四次。現代仮名遣い、漢字新字体。ルビ減。踊り字↓かな、

G II 『ちくま文庫 芥川龍之介全集5』（筑摩書房、一九八七年二月二十四日）\*底本は筑摩全集。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。

S 『少年少女希望図書館6 杜子春・蜘蛛の糸』（第三文明、一九八八年十二月十五日）\*底本は第二・第三次。現代仮名遣い、漢字新字体。漢字↓かなの書き換えがある。誤植は、へ事などは）へことなぞ）（116頁2行）。

T 『岩波文庫 蜘蛛の糸・杜子春・トロッコ他十七篇』（岩波書店、一九九〇年八月十六日）\*底本は第四次。現代仮名遣い、漢字新字体。へ）記号が混入（220頁3行）。

A V 〈第五次〉『芥川龍之介全集第九卷』（岩波書店、一九九六年七月八日）\*底本は初出だが、第四次で正された点を受け継ぐ。漢字新字体。

O II 『愛と青春の名作集 蜘蛛の糸・トロッコ』（旺文社、一九九七年四月十日）\*底本は前記『旺文社ジュニア図書館 くもの糸・トロッコ』。誤植は、記号へ？）記号落ち（165頁2行）、へ少時は）へしばらく）（165頁16行）が残る。

U 『岩波少年文庫 羅生門・杜子春』（岩波書店、二〇〇〇年六月十六日）\*底本は岩波文庫および第四次。漢字↓かなの書き換えがある。

V 西本鶏介編『読書の時間に読む本』（ポプラ社、二〇〇三年三月） \* 底本は筑摩全集。現代仮名遣い、漢字新字体。本文はなお漢字↓かなの書き換えがある。

以上、全集も第三次以前は本文吟味を怠り、流布本がそれを踏襲した。本文は第五次まで、なおざりであった。

小稿は成立を見るので、初出本文に拠る〔字体は厳密でない〕。

## 二

研究史を概観する。芥川作品内位置づけとして「仙人」を、「魔術」と対応させ（坪田譲治・吉田精一）<sup>④</sup>、「杜子春」<sup>⑤</sup>「きりしとほろ上人伝」<sup>⑥</sup>「尼提」に共通テーマを見（恩田逸夫）<sup>⑥</sup>、「往生絵巻」に共通テーマを見（田中保隆・三好行雄）<sup>⑦</sup>、「龍」に共通テーマを見（田中保隆・村松定孝・三好行雄）<sup>⑧</sup>、「報恩記」「庭」につながる疲労感を取り出し（進藤純孝）<sup>⑨</sup>、権助をへ聖なる愚人系譜の一人（関口安義）<sup>⑩</sup>とする。

流布本は多く主題を、無欲者の勝利・利己主義者の敗北として捉え、権助の一所懸命・純真さを讃えた解説を付す。へ利己心が敗れる話〔略〕信仰の奇蹟であります。〕（坪田譲治）<sup>⑪</sup>、へ欲ぶかい心は、けっして人々に幸福をもたらさしはしないのだ。〔略〕まごころこそ、いちばんたいせつなのだということをものがたっています。〕（小学

生全集編集部）<sup>⑫</sup>、へ凡人の勝利（恩田逸夫）<sup>⑬</sup>、へ利欲にこりかたまった奥さんは仙術を理解できません。〔略〕あれこれ悪智慧を働かす人間が敗北し、ばかになってはげむ人が最後の勝をしめることを示しています。〕（吉田精一）<sup>⑭</sup>、へ利欲にかたまつた奥さんには仙術を理解できないことを語っている。〕（滑川道夫）<sup>⑮</sup>、へおろかなほどの純粋さにさされた、ほめことばでもありませんか。〕（吉田精一）<sup>⑯</sup>、へ人情ぶかいこと、純真なこと、美しい、たじろがない心などを強調している。〕作品の一つ（吉田精一）<sup>⑰</sup>である、と。さらに吉田精一は、

へ芸術至上主義といわれる芥川龍之介が、少年文学に於いては、案外なくらい人情深く、そして道徳的な意図を作中に寓しているかに驚かれるであろう。彼の少年向きのもは多くないが、この方面に於ける彼は決して不健康な世紀末的な作家ではなかつた。〕と結論する。だが、これらは「仙人」のへ道徳的な意図を重視しすぎでないであろうか。

出来栄えについては、ストーリー展開の意外性が面白がられる一方、へ失敗作）の一つ（吉田精一）<sup>⑱</sup>、へものたりません。〕（高木卓）<sup>⑲</sup>、へ大してとりえない作品です。〕（松村孝）<sup>⑳</sup>、へユーモラスだが、底の浅い作品（紅野敏郎）<sup>㉑</sup>、へそれほど出来栄えとも思えない。〕（三好行雄）<sup>㉒</sup>と否定的評価が目立つ。ただいずれも印象批評風で、評価の理由根拠になると十分明らかでない。へこの期間〔略〕健康

が悪化し〔略〕疲労を感じ〕ていたから（吉田精一<sup>27</sup>）では、一方で傑作を発表していたことを説明しきれない。自選集に採録しなかった事実より推測して、へ龍之介にとつては不満足な作だったのかもしれない（三好行雄<sup>28</sup>）としても、客観的評価が芥川の自己評価に縛られる謂れはなからう。やつと、高木が〔空想力がとほしい感じ〕を挙げ、三好が〔ヘマンネリズム〕を指摘した。けれど、これとて作品に即して具体的に示されたものでない。立証する仕事が残されていよう。

そして前記のごとく、「仙人」に道話的の一面があるとしても、作者の主目的を倫理に置いてよいものかどうか。芥川が平生の主義をなげうってまで取り組んだ作と断言できるか、を含め疑問である。これらを本稿の課題に据えたい。

## 三

解答を求めるのに一寸遠回りだが、「仙人」の依拠資料を探索してみよう。

滝井孝作<sup>29</sup>「純潔」が、「仙人」は、小穴隆一君が話した材料でしたとのみ記す。それは、どのような材料であったか。

〈江戸の俗説にあつた「お竹如来」などを思わせる〉（吉田精一<sup>30</sup>）は、類想を挙げたままであつて、原典を記したのではない。へ落

語めています。中国に原話がありそうです。（福田清人<sup>31</sup>）も当て推量に止まる。

その素材探索は、須田千里「仙人のはなし」・「続仙人のはなし」を俟って、飛躍的に進展した。

須田の紹介した昔話「仙人松」の内容が、驚くべきことに、「仙人」梗概（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（Ⅳ）つまり全体に「隣の爺」型後日談を付加したものであつた。

須田はこれを話型Aと呼び、○山下久男編『全国昔話資料集成19 加賀昔話集』（岩崎美術社、一九七五年十一月十五日）「仙人松」〔話者は北出太兵衛〕、○鳥根の昔話『日本昔話大成』8（引用者初出未見）、○内田邦彦『津軽口碑集』（郷土研究社、昭和四年、引用者初版未見、『日本民俗誌大系第九卷』（角川書店、一九七四年七月二十日）に拠る）所収、青森の昔話、○川合勇太郎編著『津軽むかしこ集』（東奥日報社、昭和五年八月二十日）「婆さまの極楽往生」を挙げる。ついで遡つて、○『真宗勸化訓蒙集』巻五の一二「信ヲ以テ樹ニ上リ仙ト成ル」〔引用者未見〕を、またその出所として、○『経律異相』巻四の二一を、さらにその出典として、○『雑譬喻経』〔引用者未見〕を挙げる。

「仙人」からいえば部分的な関わりとなるが、須田は、前記梗概（Ⅲ）に開運教示の付加されたものを、話型Bと呼び、○如曇子

『可笑記』巻第二の三十二話、○青二斉能楽『興談浮世袋』巻第五「金をためる術の事」、○『為愚痴物語』巻第十九「おなじ人富る道をしゆること」(○島田泰子氏ご教示)として、○『勸化一声電』上(引用者未見)、○千葉県市原郡教育会編纂『市原郡誌』(千葉県市原郡役所、大正五年七月二十日)「医者」の頓智、○朝鮮半島の昔話(『日本昔話大成』8)「引用者初出未見」、○朴承薫「韓国スラングの世界」(東方書店、一九八六年二月二十日、管見本一九九二年六月三〇日二刷)「朝鮮王朝中期の富豪・李氏の逸話」(○島田泰子氏ご教示)として)を挙げ、話型Bの類話を話型Cと呼び、○道原撰『景德伝灯録』巻十一「鄧州香巖寺智閑禪師」(『大正新修大藏經五十一巻』)、○粟津義圭『二河白道護信録』巻三「優婆耆多弟子ノ事」(引用者未見)を落ちなく示す。

昔話「仙人松」について、須田論文はへ余りにもよく似ているので、芥川作品を読んだのでは、と疑いたくなるが、遠隔地であり、また「仙人」発表時の伝承者の年齢が七十近いこと(引用者注六十九歳)を考えると、むしろそうした昔話が大阪や石川に存在していたと考えた方がよいようだ。)と周到にコメントする。話者・伝承者に対する注意がおさおさ怠りない。須田は、『可笑記』や石川の昔話「仙人松」と比べ、「仙人」に(へ仙界への解脱の願い)を読み、間然する所がなく、感嘆した。博搜に対してだけでない。「仙人」

素材の普遍性と無限の魅力が自ずと証明されたからである。

その後、林風<sup>③</sup>「芥川龍之介の『仙人』と唐代小説『候道華』・李愛順<sup>④</sup>「芥川龍之介の中国」・王書璋<sup>⑤</sup>「『仙人』論——大正四年から大正十一年までの時間を読みみて」の発表があった。このうち、林と王とが出典に言及する。林風が、○李昉等撰『太平広記』所収「候道華」(その出典は張読『宣室志』、引用者未見)を、王書璋が、○『聊齋志異』所収「勞山道士」を、それぞれ「仙人」素材と報じた。しかし、「候道華」も「勞山道士」も、昔話「仙人松」以上に「仙人」と一致するところのあるものではない。後者は本人でさえ(へ当てはまる所が多くない)と認める代物であり、取り合わない。

ところで、たまたま一資料に気づいたので、報告しよう。

竹内勝太郎「一元先生の洵話」(永楽堂、大正元年九月二十八日)十一〜十七ページ掲載「枝を伐つて仙術を得た」項である。再掲しよう(ルビ略、傍点略、字体も厳密でない。差別用語は批判的に読まれたい)。洵話の大家・吉川一元(文政九年二月十四日〜明治四十二年八月二十九日)の談話筆記である。

洵話——天保五年、横山丸三<sup>⑥</sup>が創始した開運修行——の様子を窺うため、前後も省かないでおく。へ前後某貴紳の夜会に参りました所が、此主人公は近來一事件の困難なる問題に遭ふて、殆ど処分(へ)に苦しむとて、主公「先生<sup>⑦</sup>忘(わす)れたら宜(よろ)しうございませう、私も途方

に暮れて了つて居ります」と御相談があつた、其時主人公の容貌を熟視しますと、余程老、煉が現はれて居る、そこで私は先生「是れは貴君のお胸に此問題の困難であるといふことを深くお感じになつた為め、全く老、煉に閉ぢられてお出でなざるから、処分にお困りなされるのでありますよ」と申せしに、主公「先生それは私も多年洵宮の修行を願つて居りますから、夫れだけの事は能く分り、自身も此の老、煉を取除きたいものであると色々に工風して見ても、怎しても洵がらないから、先生に御相談するのです」と慥いはれた、そこで私は曾て洵祖に伺つた一話を思出したから、申すには、<sup>レ</sup>が、前置き。洵宮——<sup>レ</sup>宮は人体、<sup>レ</sup>洵<sup>レ</sup>は洗い浄める——術では、人の氣質を十二に大別し、十二氣の符号を<sup>レ</sup>滋・結・演・豊・奮・止・合・老・緩・墮・煉・実<sup>レ</sup>に当てはめる。<sup>レ</sup>老・練<sup>レ</sup>とか<sup>レ</sup>墮・緩<sup>レ</sup>とか引用文に出てくるのがそれである。

「昔し唐土の一村落到小百姓があつて此者は生來頗る世事に疎く、愚直一片の男であつたが、一日つく／＼と自分の身の上を考へて見ると、斯くいつまでも小作人となつて、土掘りをして居た所が、一生浮む瀬はないであらう、此頃世間の噂には、某村に往けば仙人になれる大木があるといふことだから、是よりつまらぬ鋤鎌を持つことなどを止めて、其村に出懸けて往つて、一心不乱に仙人となる術を学び、人間社会の汚れた空氣を離れ、

羽でも生し空中を自由自在に飛廻る体になつて、天人と一緒に面白い音楽でも聞いて楽しまうと、思立つては矢も盾もたまたらず、直様多年使ひ慣れた鋤鎌を抛出し、遙々と伝へ聞いた某村に尋ね往き、大樹のある家を見附けて取次を請ひ、百姓「私は此方様で、仙人になる術を教へさつしやるといふことを承はつて、態々遠方から尋ねて参りましたものですが、怎麼<sup>どう</sup>つらい辛抱でも致しますれば、怎ぞ一つ其仙人になる術を授けて下さい」と言へば、主人は何の事やら一向に合点往かず、是は的切キ印に違ひない、這麼<sup>こんな</sup>ものに相手になつて居ては隙つぶしと思ひ、逐払つて了うといふ所へ、妻君が出て来て、主人を手招きして小陰へ呼び、妻「私が今彼の男の容子を視るに、余程世事に昏く、愚直一片の人物と認めましたから、良人は一旦彼れの志望を聴いてやつて然うして仙術を授かるには、中々容易な事では往かぬ、今より三年の間、如何なる事があつても、乃公の申附る事は一切違背しないで、謹直に勉強するならば、屹度仙人にして遣ると慥言つて、彼を三年間十分に駆使た上、逐出してへば、無給金の雇人を三年使ふことが出来るから、これほど割のよい話はありません」と勧めた、此妻君は洵宮から言へば、余程墮緩の利いた奴に違ひない、主人は左ほど悪人でもなければ、余程墮緩の利いた奴に違ひない、女房に悪智恵を附けられて其氣



になり、主人「お前はまことに我が為めの張良孔明である、旨い所へ気が附いた」と賞賛して、扱て立出て妻君の教へた通り申したれば、正直一途の百姓は、小躍して大に喜び、百姓「仙人になれることであれば、私ハア骨のつく限り、怎麼事でも致しやす」といふので、爰で約束が調ひ、さあ此男は仙人になりたい一心で、朝は暗い中から起出で、水を汲む、掃除をする、煮焚をする、走り使もやる、身を粉にして立働きの、月日の経つは早いもので、最早満三年に五日を余すといふ時に至り、改めて主人の前へ出て、百姓「さて御主人様、お蔭で私も三年の御奉公も無事に相務め、愈々最う五日立ちますれば満願の日になりますから、兼てお約束の通り、仙人になる術をお授け下さいませ」と真面目に申しますから、主人は今更の如くに当惑いたし、中々此意気込では、口先で胡麻化して放逐でもしやうとしたら、怎麼乱暴を仕掛けるかも分らぬ、扱て困つたものだ、頓だ事をして除けたと、青息吐息して居ると、妻君が襖の脇から立出で、妻君「良人は何ぜ然う心が弱いのでありますか、妾は兼て斯くあらんと思つて、チャンと良策を考へてあります、彼男は元來庭前の大木を見込んで仙人になれる木であると妄信して来たものであるから、約束の日になつたならば、彼れを大樹の下に連れ行き、其木の上へ登らせ、命令通り少しも

違背しなければ、必ず仙人になれると言つて木に登らせ置き、下から長い竿を以て、段々上へ／＼と追ひ登らせたならば、自然小さい枝に取附くから、枝が折れて地上に墜ちて来て、即死するに違ひありません」と勧めた、酷い妻君ではありませんか、主人は流石に良心が尤めて、怎も三年の間無給金で瞞して追ひ使つた上、今又欺きて殺すといふは、余りに酷いと思つて、容易に應ずる勇氣も出なかつたけれども、去り連別に難関を斬り抜ける名案も浮ばないから、詮方なしにシブ／＼之を用ひることにして、満期の翌日になると、彼男を大樹の下に連れ行き、軍師に教へられた通り言ひこしらへ、旨く木の上へ登らせた、彼の男は仙人になりたい一心で、豪も危ないの畏いといふ懸念なく、言ふが儘に攀ち登りました、夫から段々今少し／＼と言へば、ズン／＼と登り、殆ど頂上に登り詰めたけれども、更に墜ちて来る模様がない、そこで妻君は又良人に教へて、「先づ其枝につかまつて居る右手を放せ」と命ずれば、声に応じて右手を放す、其次には「右の足を放せ」と言へば、其通り右足を放す、今は左手に枝を握り、左足は樹間に踏かり居るばかりである、今度は「其左手を放せ」と命ずれば、少しも畏る、所なく、左手も放した、次に「左足を放せ」と命じたるに、声に応じて之を放したれば、数仞の樹上より地上へ墜ちて来るか

と思ひきや、彼男は忽ち紫の雲に乗り、飄然として空中に飛去つたといふ話がある、

「貴君は今老練といふ二本の枝に確と両手を掛けて、後生大事と放さずに居らつしやるから、思ふ事がスラ／＼と運ばないのである、先づ彼の作男のやうに、仙人になる心持で、此二気の抛ろたる、片手と片足を思切つて放して御覧なさい、私は敢て両手両足を一度に放して御覧なさいとまでには申しませぬが、試に片手と片足だけで宜しいから、思切つて放して御覧なさい、必ず危ない／＼と思ふ所を大勇気を出して、斯くして事に当つて見られたならば、思ひの外スラ／＼と運びが付き、貴君の御意見通り成就いたしませう、吾々は常に十二の枝に取附て、之を手放す事を危うきやうに思つて居ますけれども、勇気を出して此枝を手放して見たならば、却て跡は氣持よく、物が楽に運ぶに相違ありません」と申上げたれば、主公も暫く打案じて居られましたが、ボンと膝を打て、主公「先生分りました、一つ仰せの通り遣つて見ませう」と申されました」と結ぶ。竹内勝太郎の付言は省略する。

中国種らしいけれども、前記以外まで私の知見が及ばない。この洵話をすでに横山丸三も話した由であるし、吉川は「京阪地方を巡教」<sup>⑧</sup>したから、そちらに伝わった可能性がある。小穴・芥川と洵宮術との関連もまだ調べていない。生年月日の神秘に興味を持つ人は

芥川の周縁にいたはずだが。

とまれ、この洵話、開運説法の籠に、「仙人」(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)全体と酷似の挿話が入っていた。

#### 四

この洵話には雇い主の妻の種々口出しする部分が存在する。その点で、昔話「仙人松」よりも「仙人」に一層近い。ついでながら、このため雇い主の妻登場部分が芥川の独創でないとする。〈良心〉があり〈心が弱い〉良人も既登場なので、浜野卓也<sup>⑨</sup>の「仙人」評、〈良心的だが気のよわい医者は、〔略〕芥川自身の弱さを作品で示したようなものである。〉も、当否保留とならう。

洵話の、

水を汲む、掃除をする、煮爨をする、走り使もやる、

と、「仙人」(Ⅱ)中の、

水を汲む。薪を割る。飯を炊く。拭き掃除をする。おまけに医者<sup>⑩</sup>が外へ出る時は、薬箱を背負つて伴をする。

とを並べれば、ともに現在時制が多用され、表現上類似も言いたてられそうである。

私はこの洵話を、「仙人」素材例に加えることを提案する。将来これよりもっと作品に近い依拠資料が出る可能性はあるにしろ、そ

れまでの繋ぎとして。

さて、淘話と「仙人」との差異に移ろう。

〈小百姓〉の〈浮む瀬〉願望にあたるのが、〈権助〉の

人間と云ふものは、いくら栄耀栄華をしても、果ないものだと思つたのです。〔略〕今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教へて貰ひたいと思ひますが。

となる。別に内容変更ではないが、芥川は〈不老不死〉を明言・強調する。既述のごとく須田論文は「仙人」に〈他界への解脱の願い〉を看取した。それに、〃永遠への憧れ〃願望を重ねたい。折口信夫の語を借りれば、〈心身共に、あらゆる制約で縛られて居る人間の、せめて一歩でも寛ぎたい、一あがきのゆとりでも開きたい、と言ふ解脱に対する情況が、芸術の動機の一つだとすれば、異国・異郷に焦る、心持ちと似すぎる程に似て居る〉からである。永生はもちろん、生身でかなわず、芸術作品によってであろう。権助の登天後、

医者夫婦はどうしたか、それは誰も知つてゐません。

と添記する。これは、作品が見るものに感動を与え続ける一方、作者が〈誰の墓とも知れないやうに、苔蒸してゐる〉「地獄変」最終回<sup>⑩</sup>を、あるいは〃芸術は長く人生は短し〃俗解、「雑筆」<sup>⑪</sup>に拠ればそのへ日本人或は日本の文士だけが独り合点の使い方<sup>⑫</sup>を想起させ

る。「仙人」に、実生活より芸術に一層高い価値を認めるテーマが窺える。吉田の、少年文学〈方面に於ける〉芥川が芸術至上主義〈ではなかった〉説を、再考すべきである。

このような典拠依存は、芥川の空想力不足を補う手立てであり、〃芸術と実生活〃も、芥川が繰り返すテーマであった。とすれば、〈空想力がとほしい〉・〈マンネリズム〉という先学の「仙人」印象批評をこれで少し裏付けたことなるう。

「どうも難有うございます。おかげ様で私も一人前の仙人になりました。」〔改行〕権助は丁寧に御辞儀をすると、静かに青空を踏みながら、だんだん高い雲の中へ昇つて行つてしまひました。

〈権助〉最後の謝辞・挨拶は、現在、素材に見当たらない。一応芥川の創作と考えられる。だが、〈模倣の痕跡を尋ねれば、如何なる古今の作品と雖も、全然新しいと云ふものはない〉という芥川<sup>⑬</sup>の作品である。この謝辞についても、なお取材の追及を行えば、やはり大阪を舞台とする、森鷗外「最後の一句」<sup>⑭</sup>の影をキヤッチできるかもしれない。純朴な人物の、てんから相手を疑わない言説が、二枚舌で鉄面皮な相手の胸を不意に刺す。ともに読者の溜飲が下がるサワリではなからうか。

## 注

- ① 〔大阪〕については、第五次全集の宗像和重注で解決する。大阪から宇野浩二を連想し、「仙人」より「龍介の天上」に対する応酬と連繋できるかも知れないけれど、今のところ思いつきの域を出ず、深入りしない。本作が「儉約と浪費の二面によって大阪人の性格をしめそうとしている」との中沢弥説については、東京人の見た「大阪人」的性格と括弧付きで受けとめる。「権助」の命名に「仙人」流布本の注釈をほとんど京風であった。ちなみに、従前「仙人」流布本の注釈をほとんど辞書代用に止まり、宗像和重注でようやく本格化したばかりである。
- ② すでに、竹田日出夫、「芥川龍之介事典」〔明治書院、昭和六十年十二月十五日〕・鈴木啓子〔関口安義・庄司達也「芥川龍之介全作品事典」〔勉誠出版、平成十二年六月一日〕・中沢弥〔志村有弘「芥川龍之介大事典」〔勉誠出版、平成十四年七月十日〕〕の「仙人」項が研究史概要を伝える。
- ③ 〔辞儀〕も「時宜」が本来的用字であるよし、網野善彦『忘れられた日本人』を読む〔岩波書店、二〇〇三年十二月十六日〕に教えられた。
- ④ 「かいせつ」〔前記「日本児童文学全集三」〕。
- ⑤ 「芥川龍之介の一生とその作品」〔少年少女日本文学選集③〕。
- ⑥ 「芥川龍之介の年少文学」〔昭和二十九年十月三十一日刊「明治大正文学研究」第十四号〕。
- ⑦ 「解説と鑑賞」〔前記「少年少女現代日本文学全集28」〕。
- ⑧ 「芥川龍之介解説」〔前記「日本児童文学大系12」〕。
- ⑨ 「解説と鑑賞」〔前記「少年少女現代日本文学全集28」〕。
- ⑩ 「芥川龍之介」〔日本の童話作家「ほるぷ出版、一九七一年九月十日」〕。
- ⑪ 「芥川龍之介解説」〔前記「日本児童文学大系12」〕。
- ⑫ 「伝記芥川龍之介」〔六興出版、昭和五十三年一月二十七日〕。
- ⑬ 「童話」〔菊地弘・久保田芳太郎・関口安義「芥川龍之介研究」〔明治書院、昭和五十六年三月五日〕〕。
- ⑭ 「かいせつ」〔前記「日本児童文学全集三」〕。
- ⑮ 「あどがき」〔前記「小学生全集44」〕。
- ⑯ 「芥川龍之介の年少文学」〔昭和二十九年十月三十一日刊「明治大正文学研究」第十四号〕。
- ⑰ 「芥川龍之介の一生とその作品」〔少年少女日本文学選集③〕。
- ⑱ 「芥川龍之介の児童文学」〔昭和三十三年八月一日刊「国文学解釈と鑑賞」〕。
- ⑲ 「作者と作品について」〔前記「新・日本児童文学選7」〕。
- ⑳ 「芥川龍之介の生涯と作品」〔前記「カラー版日本の文学8」〕。
- ㉑ 「解説」〔前記「角川文庫 杜子春・蜘蛛の糸」〕。
- ㉒ 「解説」〔前記筑摩書房版「芥川龍之介全集第三巻」〕。
- ㉓ 「作者と作品について」〔前記「ジュニア版日本文学名作選6」〕。
- ㉔ 「芥川龍之介」〔日本の童話作家「ほるぷ出版、一九七一年九月十日」〕。
- ㉕ 「解説」〔前記「春陽堂少年少女文庫世界の名作・日本の名作8」〕。
- ㉖ 「芥川龍之介解説」〔前記「日本児童文学大系12」〕。
- ㉗ ㉘に同じ。この古田説は、「塵勞に疲れた姿が、諦悟の情で愛撫されてゐる」〔進藤純孝「伝記芥川龍之介」に継承され、それが竹田日出夫「仙人」に引用される〕。
- ㉘ 「芥川龍之介解説」〔前記「日本児童文学大系12」〕。
- ㉙ 昭和二十六年一月一日刊「改造」三十二巻一号。
- ㉚ 「解説」〔前記「角川文庫 杜子春・蜘蛛の糸」〕。
- ㉛ 「解説」〔前記「偕成社文庫 杜子春・くもの糸」〕。

- ③② 平成六年二月一日『奈良女子大学国文学会誌』37号。
- ③③ 平成十二年九月一日『京都大学国文学会会報』48号。
- ③④ 平成十年六月一日『解釈』四十四巻6号。
- ③⑤ 平成十二年三月十日『広島大学教育学部紀要』李愛順の、〈医者の女房〉を西洋、〈権助〉を日本、ラストをへ手に入れたと錯覚した中国に反対に取り込まれた、の、それぞれ寓意に解する説は、「仙人」を、例えば明治政治小説のような寓話とする前提の用意無しでは、直ぐに納得することが困難である。
- ③⑥ 二〇〇四年二月一日『千葉大学社会文化研究』8号。
- ③⑦ 淘宮術をはじめた横山丸三については、洗雲荘〔森統三〕〔広瀬六左衛門雑記抄(三)〕〔昭和十四年五月十五日刊『伝記』〕中に、伝記資料がある。
- ③⑧ 竹内師水〔同書「序」〕。
- ③⑨ 『芥川龍之介の生涯』〔前記『少女少女希望図書館6』〕。
- ④⑦ 大正七年五月二十二日付『大阪毎日新聞』。
- ④① 大正九年十一月一日刊『人間』〔巻号表示ナシ〕。
- ④② 『僻見』〔大正十三年三月一日刊『女性改造』三巻三号〕。
- ④③ 大正四年十月一日刊『中央公論』三十年十月号。